

血の匂いと、倒れ込んでくる身体の重さに夕星はデジャヴを覚えた。

胸に風穴を穿たれた陽真里を抱きながら、正気は少しずつ引き潰されていく。

「おい……ヒバチ。なあ……おい、って」

返事はない。虚しさの滲む声だけが廃ビルの中で反響する。

一体どうして、彼女は麗華との間に割り込んできたのだろうか？

その答えはシンプルで——彼女が逃げなかったからだ。物陰に潜み、息を殺していたのだろう。そして彼女は夕星の危機に思わず飛び出してしまったのだ。

『逃げてくれ』……って、お願いしたよな」

再三繰り返してしまうようだが、夕星のエゴシエーター能力は「物質Aを一度砂塵へと分解し、物質Bに再構築する」にするものであって、個人の思考に作用するものじゃない。言うなれば、それが夕星の力の欠陥であった。

「ゆう……せい……」

血濡れた手で陽真里が袖を掴む。目は白濁して、言葉を紡ぐ口の端からも血がツー、と流れた。素人目に見たって、明らかに言葉を話していい状態じゃない。一呼吸肺が息を吸うたびに胸元の朱が広がっていく。

それでも彼女は言葉を紡ぐことをやめなかった。

「多分ね……バチが当たったんだと思う……」

「……は？ ……何だよ、バチって？」

「あの魔女は私を見てこう言ったの……『この世界に怪獣を生み出したエゴシエーター』って」

そのやり取りならば、夕星も聞いていた。

だが陽真里がエゴシエーターでないことは、夕星が回収したメッセージカードが証明している。カードがここに存在しているのだから、彼女はスターレター・プロジェクトの参加者から除外され、エゴシエーター因子を獲得する要因もなかったことになるのだ。

因果関係から考えたって、彼女は本来「日常」の側に立ち続ける善良な一般人であったはず

「違う、お前はエゴシエーターなんかじゃない！ それにお前みたいなお人好しが、この世界に怪獣を生み出せるわけがねえんだ！」

止血のために彼女の傷口を押さえつけ、夕星はめいっばいに首を振った。

もう十悟じゅうごの時のような取り乱し方はしない。迅速に彼女をエリアズの施設まで送り届けることが出来たなら、蘇生措置を施せるかもしれないのだから。

「ねえ、夕星……」

「無理に喋んな！ 傷が開く！」

夕星はない頭を回しながら、陽真里を救う方法だけを考え続けた。

だが、彼女はそれを望まない。まるで断罪を求めるように、独白は続く――

「聞いて、夕星。……私ね、『こんな世界、いっそ全部、ブツ壊れちゃえばいいのに』って願っちゃったの」



あれは中学の時だった。友達伝いの噂で陽真里は、夕星の家族がバラバラになったことを知った。

両親が蒸発し、彼は一人取り残されたのだ。

それから数週間、夕星は学校に通わなくなった。後になって聞いたのだが、その期間は捜索願いの作成や、施設への入所手続きに、休む間もなく追われていたらしい。

「夕星が戻ってきたら、私が友達として彼の隣に寄り添おう」「私が一人で寂しくて泣いていた時、声をかけてくれたのが夕星だったんだから」と、陽真里は心に決めて彼の帰りを待っていた。

そして、数週間ぶりに夕星が登校して来たとの噂を聞き付けて、彼女は真っ先に教室に走った。隣のクラスの男子に会いに行くというのは、少し気恥ずかしいものもあったが、そんなことを考えている場合でもない。

彼を元氣付けるために早起きして作ったお弁当を手に、陽真理の教室のドアを開けた。

だが、そこで彼女は足を止めることになる。

「……んだよ、ヒバチ」

思春期に入った夕星が悪態を付くのは、いつものことだった。だが、今回のそれは普段のものと同様に違う。「拒絶」の意思が滲ませていた。

普段と違うのは目つきもだ。伸び切ったボサボサになった髪の下に隠れた相貌は、何も映そうとしない。痩せ窪んだ目つきはまるで死人のようで、黒い瞳はただ虚空に落ちていた。

「……んだよ、って聞いているんだよッ！」

「えっ……いや、な、何でも」

口を突いて出たのは、そんな誤魔化しの言葉だった。

陽真里には一瞬、目の前に立つボロボロな少年が誰か分からなかった程だ。夕暮れの教室で、笑いかけてくれた幼馴染の面影はどこにもない。

「だったら話しかけんなよ、鬱陶しいから」

そう突き放されると同時に、陽真里は自分がいかに軽率だったかを思い知る。

何が、「私が彼の隣に寄り添う」だ。夕星の心情を考えせずもせず、一方的な善意を押し付けようとした自分は、善人気分に関りたいただけの単なるエゴイストに過ぎなかった。

「私は最低だ……」

夕暮れの教室で、一人居残った陽真里は震える肩を抱いていた。

そんな彼女の脳内をほんの一瞬、とある考えが掠めた。——「いっそ、全部壊れてしまえばいいじゃないか」と。

ある日唐突に、強大な何かが現れて。夕星の「日常」を完膚なきまでに叩き壊してしまうのだ。

彼は当然戸惑うだろう。だが、それで構わない。

これから始まる夕星にとつての「日常」が最悪なものになってしまうなら、いっそ「非日常」に塗りつぶされてしまった方がマシなのだ。

彼を捨てて蒸発した両親も、彼を救おうとしないクラスメイトも。何より、一方的な善意を押し付けてくるだけの自己中心的な幼馴染も。

そんな連中はまとめて、強大な何かに踏み潰された方が良いに決まっている。

「夕星にとつて辛い世界なんて、いっそ全部ぶっ壊れちゃえば、」

陽真里はそこまで言いかけて、ハッと我に帰った。

感情だけが理屈を飛び越えて、明らかにまともじゃない考えに辿り着いてしまったのだ。陽真理は頭を振って、思考をリセットしようとして試みる。

だが、どんなに考え方を切り替えようとしても、一度イメージしてしまった「強大な何か」の姿だけが、頭から離れようとしめない。

「今度こそ、ちゃんと夕星と向き合おう！」と覚悟を決めて、彼にお節介を焼き始めた時も。更生した彼と共に中学の卒業式を終えた時も。

思い描いた「怪獣」のイメージだけが、頭の片隅でジッと息を潜めているのだった。



「聞いて、夕星。……私ね、『こんな世界、いっそ全部、ブツ壊れちゃえばいいのに』って願っちゃったの」

その独白を聞かされた夕星の脳内は、真っ白になってしまった。

「何言ってるんだよ……全然っ意味がわかんねえよ……」

だって、おかしいじゃないか。自分の知る藤森陽真里は生真面目な幼馴染で、バカみたいなお人好しで、それで……

「いつも偉そうなこと言ってるのに、最低だよ……だけど、もう一つだけ貴方に伝えたい言葉があるの」

困惑する夕星に構わず、彼女の手がそっと頬に添えられた。冷たくなってしまった指先に、思わず血の気が引いてしまう。

「こんな私の友達でいてくれて、ありがとう……大好きだよ、ゆう——」
ブツリ、と。電源の落ちたイヤホンが沈黙するように、その続きを聞くことは叶わなかった。

「……見つけたぞ、〈エクステンド〉のエゴシエーター」

背後から、また足音が近づいて来た。

厚手のブーツが、剥き出しになったコンクリートをコツコツと踏み鳴らす。

「その娘は貴様と恋仲だったのか？ だとしたら、悪いことをしたな」

「……うるせーよ」

「だが、安心しろ。貴様もすぐに葬ってやる」

「だから……うるせえって言うてんだろうがッ！」

勝手に、陽真里が死んだような言い方をされるのが何より気に食わないのだ。夕星は身を翻し、渾身の胴回し蹴りを放つ。

だが、それは半歩引いた麗華の三角帽を掠めるだけで、カウンター気味に突き出された打突が額を割る。

「クソッ……！ この程度ッ！」

陽真里の死はまだ確定していないのだ。止まった脈を観測したわけでも、心音が途絶える瞬間を聞いたわけでもないのだから。

だから、夕星は願う。——「彼女を生かしたい」と。

旋回する歯車状の瞳を見開きながら、大声を張る。

「俺を助けるッッ！！ 〈エクステンド〉ッッ！！」

「馬鹿の一つ覚えだな」

麗華は淡として、吐き捨てる。

〈エクステンド〉の本体がここにはない以上、夕星のエゴシエーター能力が影響を及ぼすまでにタイムラグを孕むことは、周知の事実だ。

だから、夕星は数十秒を稼ごうとする。短い詠唱から飛び出してくる鎖をサイドステップで躲し、麗華の懐へと飛び込んだ。下手な喧嘩殺法が通じないのは学習済みだ。だったら、と口を大きく開けて麗華の手元に食らい付いく。

「このッッ……！！」

クローブ越しに思いつきり、歯を突き立てやった。

「ひびいたら、負けなんだよはへなんだよッッ！！」

二人が停滞する最中に、再びミサイルが突っ込んできた。白煙が麗華の視界を侵そうとするも、彼女は「×××」と短な詠唱を終える。

皓い光の幕が、バリアのように彼女をすっぽりと覆ってみせた。その得意げな顔は「同じ手を二度も食わん」と言いたげだ。

だが、夕星も見逃さなかった。ミサイルと共に廃ビルへと飛び込んできたシルエットがもう一つ。

「助けに来たよ、神室くん」

それが腰に下げた大太刀を抜き放とうとする一部始終を。

未那月刀剣術——子式・抜刀。振るわれた銀線は容易くバリアを断絶し、魔女の三角

帽を切り裂いてみせる。